

## お宮の雪降ろし

毎年冬には、2メートルもの積雪になる昭和村。人が住んでいる家は中が温められ屋根の雪はその都度落ちてゆくけれど、特に晴れ間のない日が続くと、空き家や蔵の屋根の雪はそのまま積もっていくことになる。圧縮された雪はものすごい重さになって、建物を傷めたり潰してしまうこともある。そうなる前に、屋根の雪降ろしをしなければならぬ。

家の裏には小さな石の階段があって、その上には「山の神さま」のお宮がある。夏に引いた「からむし」は、毎年そのお宮に納めている。1月に入ってすぐ「そろそろやなんねえな（そろそろやらなくてはいけないな）」という義父セイイチさん（90）の一言で、この冬最初のお宮の雪降ろしを行うことになった。

まず、お宮まで行くのに一苦労。セイイチさんの作ったカンジキを履いて、雪を漕ぎながら坂道をのぼっていく。ふうふう息が切れる。お宮の屋根を見て、想像以上の積雪に驚いた。「いやあ、タイユキ（大雪）だ」とセイイチさん。一番はじめの雪降ろしというのは、久しぶりなことも手伝って、なんとなくワクワクするような気持ちがするけれど、屋根にこんもり積もった雪を目の当たりにして、「まったく遊びじゃない…」と少し気が重くなった。しかも去年まで一緒に雪降ろしをしていたセイイチさんは、今年からもう上がらない。90歳なので、当然と言えば当然。雪の様子を確認したセイイチさんは、家に戻っていった。

「コウシキベラ」を使って下から屋根の雪を崩し、梯子を立てかける場所を作る。夫のヒロアキさんが先に上がってスペースを作ってから、私も上がる。「最初が一番おっかない」とセイイチさんは言う。周囲の雪がまだそれほど積もっていない最初の雪降ろしは、地表と屋根の高低差が大きく、落ちた時の危険性も、感覚的なこわさも大きくなる。ここで初めて、セイイチさんがいない雪降ろしということを感じた。作業の間「あんまはじっこさ行くな」「気いつけろよ」と何度も何度も口にしてきたセイイチさん。その存在がいないのだと、ハッとされた。それと同時に、もしヒロアキさんが屋根から落ちてしまったとき、私がなんとかしなくてはいけないのだと、急に怖くなった。「ねえ、今もしヒロアキさんが落ちたら、私はどうすればいいの」と背中に話しかけると、「すぐ落ちた場所を掘って助けて」と言われた。その場合私は屋根から飛び降りるのだろうか、いや、そうしたら自分も埋まってしまうか。梯子で降りて、カンジキを履かないとだめか、でもそんなことしてる暇あるのか…。落ち着いて行動できる気が全くしない。生き埋めになったヒロアキさんを置いて、家まで人を呼びに行くこともできない。セイイチさんがいないということが、肩に重くのしかかる。

これまでは3人で1時間もすれば終わっていたお宮の雪降ろし、今回は二人で2時間かかった。着ているものすべて替えなくてはならないほど、汗びっしょりになった。次はもう少し早いタイミングで降ろそう、とヒロアキさんと話した。去年は春までに、3回の雪降ろしをしている。今年は何回、屋根に上がることになるだろう。一步間違えば、命を落としてしまうかもしれない作業だということを肝に銘じて、出来る限り、お宮を守っていきたいと思う。